

会社の事業承継については、随分前から考えていたことだった。幸い私は良きスタッフたちに恵まれていた。そして彼らに経営をバトンタッチするならば彼らが四十代早々のタイミングでしなければならぬと考えていた。それは私が六十五才になるときだと。

なぜ、彼らが四十代早々の時期に事業を譲らなければならないと考えたのか。その理由の第一は若くなければいけないということだった。私が友人のYと事務所を立ち上げたのはちょうど三十才のときであったが、特にどこかの事務所でノウハウを学び独立したということはなく、ほとんど学生から起業したようなものだった。正直、都市計画や建築設計の専門的知識や実務経験は無いに等しかった。ただ、学生時代の十年間近くを歴史的街並みの保存のための住民運動の支援に費やしてきた体験だけが総てであった。それでも、依頼を受けた仕事ひとつひとつを一から考え、自分たちなりの解にたどり着くまで、膨大な時間を調べ考えることに費やすことができたのは、若かったことにつきる。

また、経営的に苦しい時期にも、未経験の分野でありながらその分野では先進的な取り組みをチャレンジすることができたのも若かったからできたことだと思っている。

当時、六十五才になってもまだまだ現役でやれる自信はあったし、それまでの成果を評価していただきご指名いただくこともまだまだあったし、新しいチャレンジも怠らなかつた。しかし、そのまま七十とか七十五とかまで私が経営を続けたとすると、後継者たちは五十を優に過ぎてしまう。その年になると、それまでやってきたことには円熟味を増すであろうが、失敗を恐れず自分なりの新しいチャレンジをすることが難しくなってしまうのではないか。仮に失敗したとしても、それを糧に再び立ち直す体力、気力があるだろうか。また、社会状況が大きく変わるなど時代の転換期に遭遇した時に、それに柔軟に対応して乗り切ることが出来るだろうか。

そのように考え、事業承継のタイミングは私が六十五才になる時と決めている。そのためにはバトンを受けても良いと思ってもらえる経営状況と実績をつくる必要があったが、それに最後の十年を費やした。

幸いにして、優秀な三人のスタッフに共同代表というかたちでバトンタッチをすることができた。三人はそれぞれに个性的で、得意とする分野や持っているネットワークが異なる。それをひとつのかたちに束ねることができれば私にはできなかつた新しい道を開いていけるのではないか。そんな思いでの事業承継だった。

正式なバトンタッチは私の誕生日に合わせて六月末とした。七月に入ると恒例の事務所旅行をかねてスタッフがそろって竹山に来てくれた。天気にも恵まれ敷地の中を案内したり、竹山での暮らしの様子を話したりして時間を忘れた。いい加減酔いが回った頃、事務所を引き継いで来れたN君がぼつりと「石塚さん引退するって本気なんですね。竹山に来てそう思いました。」と言った。

